

# 大会テーマ研究会/全体会

10月28日(木) 14:45~17:00

地域史料の充実をめざして 一新潟からの提唱—

## 大会テーマ研究会の趣旨と構成

上越市史編さん室 山本 幸俊

大会テーマの趣旨については、先の特集「新潟大会を前にして」(『会報』No.50)でもふれた。ここでは要点の確認と報告の構成について述べる。大会テーマの「地域史料の充実をめざして」は昨年度の沖縄大会における全体テーマを引き継いだ。それは、沖縄ほどの戦災による史料焼失のインパクトはないにしろ、「史料の喪失」状況は今も全国各地で静かに進行しているという昨年度の主題をしっかりと受け止めなければならないと考えたからである。また、史料を守るというだけでなく地域の記録を生成する活動や非記録事象を記録化するという「記録の創造」的活動の重要性も再確認したい。

副題の「新潟からの提唱」については本大会の特色となる。具体的な提唱は全体会と分科会において行う6つの新潟からの報告によるが、それらを繋ぐ論点として次の二点を重視する。

その一つ目は、地域史料の現地主義の原則である。これは以前から言われてきたことであるが、少し膨らませて「現地で保存」し、「現地で整理」し、「現地で利用」することに、出来るだけ当該の地域住民が主体的に関わっていくことであると考えている。しかし、現実には新潟においても、高齢化や過疎化等で地域社会の変貌が著しく、地域の中で史料を守ることは容易なことではない。各地に文書館を始めた史料保存利用機関の整理や文書館思想の普及しつつある今日、地域史料の問題を考える上にお

いて、まずは現地主義の原則について、それぞれの業務の中で整備して位置づけておく必要がある。この原則のもつ史料保存の思想を十分に踏まえられないことには、歴史資料と地域社会(市民)との関わりは稀薄さを増すばかりではないだろうか。

新潟からの提唱の二つ目は、現地主義を支える「史料保存ネットワーク」についてである。こちらはその重要性が再三指摘されながら、具体的な議論は進んでいない。本大会では、地域の姿を伝えていくための様々な地域史料の存在と重要性を確認し、それらを「繋がり」の中で守り活用していく方向を探る。特に地域史料の中核を担う公文書の重要性と市民の利用を考慮したとき、改めて文書館等史料保存利用機関の役割が注目される。私たち史料保存と利用に関わる者が、多様なレベルと状態にある地域史料を、現地主義を踏まえつつ有機的な連関を実現し、センターとなって市民とどう「繋がる」ことができるのか、地域におけるネットワークの主体をどう育て、どう「結ぶ」のか緊急の課題といえる。

次に、報告の構成について述べる、全体会では上記二つの提唱を踏えて総括的な論点を異なった角度から報告する。本井晴信氏からは、平成4年に開館した新潟県立文書館の8年間の取り組みを中心に、地域社会のなかに果たせる文書館の役割について、現在何が問われているの

かを考える。続いて、長谷川伸氏からは民間の史料保存活動の実例として、平成9年に発足した越佐歴史資料調査会の活動を中心に、地域史料の現状や地域住民の参加、地元行政との関わりや課題について報告する。明日の第1分科会では全体会の本井報告を受けて、行政内機関をめぐる問題について、「地域における公文書保存管理の現状と課題」をテーマとする。公文書の保存と利用は文書館の設置いかんを問わず私たちの中心的な問題であり続けており、笹井隆夫氏からは、公文書館法の趣旨を知り情報公開下での文書管理を進める中で歴史資料としての保存を模索する上越市の現状について、稲川明

雄氏からはそうした共通問題を抱える県内市町村のネットワークとして平成4年に結成された新潟県歴史資料保存活用連絡協議会の活動を長岡市の事例を踏まえて紹介する。第2分科会は全体会の長谷川報告を受けて、「地域における民間史料の保存と活用」をテーマとする。佐藤利夫氏からは大字単位で独立した文書庫をもつ地区が多く、大字史の編纂も盛んな佐渡地域の事例について、また、田村和郎氏からは明治期に第四国立銀行として設立された現在の第四銀行における文書・記録の管理と企業史の編纂について報告する。以上、参加者の活発な議論を期待したい。